【特集】ねじ商社×IT　令和時代の経営を探る

サンコーインダストリー
数理モデルを積極的に活用
「3Qネット」、新機能で受注率向上

サンコーインダストリー㈱（大阪市西区）は、業務において適性在庫管理システム「A-PPM（エイピム）」や業務支援システムである「SH-PS（シップス）」、そして早くも2000年よりバーコード検品システムを使用しているほか、2017年からは顧客専用の注文サイト「3Qネット」を開設するなど社内外の両面においてIT化を積極的に活用している企業として知られている。奥山淑英社長に最近の取り組みや今後の計画について話を聞いた。

開設2周年を迎えた「3Qネット」

「今まで以上に品質を意識」と話す奥山社長

―「3Qネット」が2周年を迎えました

開設以来少しずつ改良を重ねてきたが、昨年9月からは新機能として「受注可能性リスト」を実装した。システムが利用者の振る舞いを分析し、特徴を把握した上で発注漏れが発生しているケースもある受注率向上に繋がっている。

なお、「3Qネット」はスマートフォンなど携帯端末からもアクセスできるようになっている。在庫数の確認なども容易に行え、利用頂いているお客様からは好評のため機会があれば一度利用して欲しい。

―AIを活用しているのでしょうか

AIとは異なる。当社のITは数理モデルを活用する方向へとシフトしており、物流センターでも数理モデルを積極的に活用している。例えば需要予測にも数理モデルを利用しているが、予測の精度を高めようとすると計算に膨大な時間がかかる。今は「費良バランスで運用できているのではないか。

実現はしていないようだが、他業界のある大手企業は需要予測の的確に行うことで「注文が発生する前に商品が届く」という構想を持っていたようだ。つまり、そもそも注文が不要となる訳だ。現時点で具体的な構想がある訳ではないが、このリストから発展させてゆくゆくは同じようなことができないかとも考えている。

―そのほかデジタル技術の活用や物流面での取り組みは

例えば小箱のピッキングに画像処理技術を活用している。自動倉庫から出てきたケースを撮影し、瞬時に画像処理を行うことでピッキング対象をハイライトするシステムで、作業者が探す手間が省けて生産性が非常に上がった。

特に近年では注文の多品種少量化が進んだことで全体を一括りに自動化、効率化することが非常に難しくなっている。当社としても細かい改善を重ねる方針にシフトしており、ITや自動化を進めることで例えば現在別々の場所で梱包している小箱とパラを合わせる。今は手間のかかる工程がピッキングだが、改良を加えたローターリーラックによりて自動化を図ろうとしている。

―近況と今後の計画

8カ月が終わった時点で業績としては増収増益だが、内容としては概ねいとほぼ想定通りの内容となっている（※）。春頃が底と見ているが先行きは依然として不透明だ。

また今後の計画としては既存の事業所が手狭になってきたこともあり、転させる予定だ。拡張移転という形となる。

―2020年を迎えるにあたって

今まで以上に「品質」を意識し、管理レベルの向上に注力していきたい。

2021年には東京支店を拡張移転

東京オリンピック終了後の2021年に東京支店を錦糸町から晴海へと移転していく、というようなきめ細かいニーズに対応していきたい。また最も手間のかかる工程がピッキングだが、改良を加えたローターリーラックによりて自動化を図ろうとしている。

―近況と今後の計画

8カ月が終わった時点で業績としては増収増益だが、内容としては概ねいとほぼ想定通りの内容となっている（※）。春頃が底と見ているが先行きは依然として不透明だ。

また今後の計画としては既存の事業所が手狭になってきたこともあり、転させる予定だ。拡張移転という形となる。

―2020年を迎えるにあたって

今まで以上に「品質」を意識し、管理レベルの向上に注力していきたい。

新機能は発注漏れの可能性がある商品を知らせてくれる

本社内にあるサーバールーム

―ありがとうございました（※取材日＝2019年11月2日）

「受注可能性リスト」を実装

―「3Qネット」が2周年を迎えました

開設以来少しずつ改良を重ねてきたが、昨年9月からは新機能として「受注可能性リスト」を実装した。システムが利用者の振る舞いを分析し、特徴を把握した上で発注漏れが発生しているケースもある受注率向上に繋がっている。

なお、「3Qネット」はスマートフォンなど携帯端末からもアクセスできるようになっている。在庫数の確認なども容易に行え、利用頂いているお客様からは好評のため機会があれば一度利用して欲しい。

―AIを活用しているのでしょうか

AIとは異なる。当社のITは数理モデルを活用する方向へとシフトしており、物流センターでも数理モデルを積極的に活用している。例えば需要予測にも数理モデルを利用しているが、予測の精度を高めようとすると計算に膨大な時間がかかる。今は費良バランスで運用できているのではないか。

実現はしていないようだが、他業界のある大手企業は需要予測の的確に行うことで「注文が発生する前に商品が届く」という構想を持っていたようだ。つまり、そもそも注文が不要となる訳だ。現時点で具体的な構想がある訳ではないが、このリストから発展させてゆくゆくは同じようなことができないかとも考えている。

―そのほかデジタル技術の活用や物流面での取り組みは

例えば小箱のピッキングに画像処理技術を活用している。自動倉庫から出てきたケースを撮影し、瞬時に画像処理を行うことでピッキング対象をハイライトするシステムで、作業者が探す手間が省けて生産性が非常に上がった。

特に近年では注文の多品種少量化が進んだことで全体を一括りに自動化、効率化することが非常に難しくなっている。当社としても細かい改善を重ねる方針にシフトしており、ITや自動化を進めることで例えば現在別々の場所で梱包している小箱とパラを合わせ